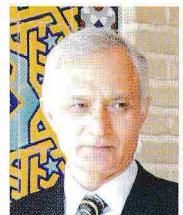


フォーラム委員会だより

第191回 aaca フォーラム ペルシア絨毯 歴史と背景

千代田トレーディング（株）会長
アリ・ソレマニエ・フィニ



絨毯の起源は羊を放牧していた遊牧民に求められる。彼等は羊の皮を敷物や衣服として使っていた。羊の毛を刈り、糸の紡ぎが出来るようになって平織りが可能となり、徐々にパイル織の絨毯が織られるようになった。

羊毛も他の天然繊維も永い年月が経つと朽ちてしまうため、古い絨毯は殆ど残っていない。1949年以前に発掘された最も古い絨毯は、9世紀のものでエジプトのフォスタト（Fustat）で見つかり、その後13世紀の絨毯数枚がトルコのコンヤで発掘されたくらいであった。これらの絨毯はイスタンブールのイスラム博物館が所蔵している。

1949年ロシアの考古学者ロデンコがビスクから南東約200キロメートル離れ、外モンゴルから80キロメートルのアルタイ山脈の麓にあるパジリク古墳のサカ族の王の墓で、200cm×183cmの絨毯を凍っている状態で発掘した。ロデンコによるとこの絨毯はアケメネス王朝の時代のもので、B.C400年にイランの東ホラーサン地方で織られたものと推定された。その後、コズロフによってシベリアのノインウラで氷土の中から絨毯の断片一枚が発掘された。この断片は年数が刻まれた箱に入っていて、西暦3年のものと判定されている。パジリク絨毯とこの断片はロシアのエルミタージュ博物館が所蔵している。

その後長い間、古い絨毯が発見されず絨毯の存在を歴史書や旅行記から想像する事しか出来なかった。

特にササン朝時代（A.C227～651）の絨毯は殆ど最近まで見つかっていなかった。しかし、この10年の間にイランの東の地域で見つかったパイル織の断片がヨーロッパのオークション等に出て、それらをカーボン14で試験した結果ササン朝時代のものと判明した。これらの断片は、新しくできたクウェイトの博物館が所蔵している。

世界の美術館や個人のコレクションからもわかるように、サファヴィー朝（1501～1722）はペルシア絨毯の最盛期であった。この時代には、カシャン、イスファハン、タブリーズ、ヘラート等で王室工房ができ、ペルシア絨毯の歴史で最も優れた作品が沢山製作された。

シャータハマスプ1世（在位1524～76）の年代が織りこまれている名品がある。その絨毯はミラノのポルディ・ペツツオリ美術館が所蔵しており、ギャソッディン（GHIASODDIN）作のメダリオン狩獵文絨毯で1522～23

年作と織り込まれている。

シャータハマスプ1世時代の最も有名な名品はアルデビル絨毯である。この絨毯は対で製作されたもの一枚はロンドンのヴィクトリア＆アルバート博物館、もう一枚はロサンゼルス郡立美術館が所蔵している。この絨毯には1539～40年と、製作者マグスード・カシャニーの名前が織りこまれている。

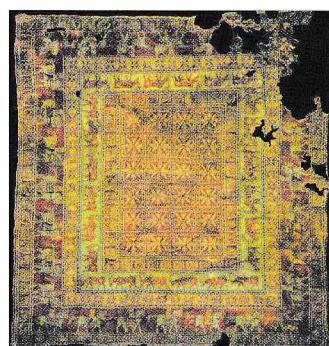
シャータハマスプ1世の後、アッバス1世（在位1588～1629）の時代は、特に芸術に力が入りペルシア絨毯の黄金期といえる。

MIHO MUSEUM所蔵の16世紀サファヴィー朝時代のメダリオンコーナー狩獵動物闘争文様の絨毯604cm×322cmは逸品である。この時代の最も素晴らしい作品の一つといえよう。ポーランドのサングスコ王家が所有していたので、この絨毯はサングスコ（SANGUSZKO）絨毯として有名である。

8世紀～10世紀にかけての国の財務書類によると年間数千枚の絨毯が税金として国に納められていたことがわかる。

19世紀後半のヨーロッパでアニリン染料が発明され、イランの絨毯づくりにも大きな影響を及ぼした。それまで手で紡いでいた糸の代わりに機械で紡績した糸が使われるようになり、商業化が進んでいった。徐々に本来織られていた地域や民族も崩れ絨毯のアイデンティティーが薄れていった。

近年、このような商業主義の絨毯が氾濫してきていることを憂い、本来の輝きを取り戻そうとする動きがでてきた。我々はこの動きをペルシア絨毯のルネッサンスと呼んでいる。



パジリク古墳出土約2500年前の絨毯 200cm×183cm



ソレマニエフィニイ工房作品
カシャン ゴレスタン 313cm×212cm